

〔古今和歌集十七〕題をらす

よみ人をらす

おしてゐるやなにはのみつに焼鹽のからくも我は老にける哉又はおほとものみつのはまべに、
〔顯註密勸七〕おしてゐるや難波のみつとは所の名也喜撰式には、まほうみをばおしてゐるやと云
と書り、但おしてゐるやなにはとつゞくる事はよし有べし、なにはのみつとは、難波の浦にみつ
のうらも有といへり、またおほとものみつの濱ともいへり、

〔古今和歌六帖三〕鴉

ひとりのみみつの堀江にすむ鴉の底はたえずも戀渡る哉

〔萬葉集一〕山上臣憶良在大唐時憶本郷歌

去來子等早日本邊、大伴乃御津乃濱松待戀奴良武

〔萬葉集一〕太上天皇統幸于難波宮時歌

大伴乃美津能濱爾有忘貝家爾有妹乎忘而念哉

右一首身人部王

〔冠辭考十〕おほとものみつの濱 高しの濱

萬葉卷一に、太上天皇幸難波宮時の、大伴乃美津能濱爾有忘貝云云、此つゞけ集中こはとかく

すれど意を得ねば、くさく、擧つ、先いにしへ大伴宿禰の遠つおや道臣命は、久米部を主どり

て、名高きこと古き史共に見ゆれば、更にもいはず、卷十八に家持ぬしの歌に、大伴能遠津神祖

乃其名乎、婆大久目生登於比母知氏都加倍之官とよめり、さて神武紀に、大御瀨都瀨都志、俱梅

能固邏餓てふ御ことば多きは、大久米部のみならず、それつかさどる道臣命をもかね給へり、

然ればこゝは大伴の瀨都々々志てふ意にて、御津の濱に冠らせたるにや、中御津は、紀に難

波御津、萬葉に住吉の御津といへるも同じ所にて、神功紀に、大津渟中倉之長峽てふも即同じ